

以上に依て「己心義論」の一端を述べたが、私達はこれを如何に考へるかに依て、兩氏の説の一方に偏するのである。

例へて言ふと、汽車の發、着に關係せない單なる汽車の時間表か、正確な時間表か、舊の時間表かを考へねばならない。又正確な時間表であるならば、同時に上りと下りの汽車が、着車し又發車するのではないか、或は乗客が時間の錯誤から下りと上りと間違へて目的地とは反對方面の汽車に乗り込んで居るのではないか、等も考へて損はしないと思ふ。最後に私の「ノート」の一節を引いて禿筆を投げよう。

「己心義」に於て、所化の義を山川居士は「所化以與_レ本佛一體也」の義とし、清水尊臺は「同様なり」の義とす。「己心」とあるがゆゑに、凡夫陰妄の「己心」なりと斷する事は出来ない。と清水尊臺を破する山川居士の説誠に然り、されど所化以同體ならば本佛本化所化の差別無いであらう。故に所化本佛の差別なし。同體なるが故に己他の別なし。「如來とは一切衆生也」此れ當家の極地である。

戒律への抗議

戒律主義を今日に於て批判の問題とするのは、甚だしく時勢後れであるやうに見えるであらう。併し傳承の戒律を絕對化する

然し同様なる義を考ふれば、佛に遠近、所化に高低の差ありて、本化が之を代表すると雖も、本化以下の機なくば何を以て本化を召さんや、それ本時と云ふ、本時ならざる時あるが故か然も本時と此土と何の異がある、本時娑婆世界即此土也、本時又々在世也や末法なりや如來とは一切衆生也、本化即衆生の一也、「宗祖然も天台に謙讓せらる」(山川居士説)「又何ぞ六識を攝するにためらはんや」(清水尊臺説)それ法華經は爾前に異り一切衆生を成佛せしむ、故に六識を己心の中に攝するも又不可あらんや。然れども此見「與」也。「奪」の邊に従へば山川居士の如し、與奪共に當家の許す處、故に一に執するは狹となす。もとより兩説共に不適なるに非ず、更れど一に執するは不可、兩説俱立して此處に本化別頭の道を通ず。

祖文に曰く「心地を九識に持ちて修行をば六識にせよ」(縮一〇五三)と。

禿筆、以て聖意を失せん事を恐る。

(二六〇〇、一〇、二八)

三 枝 光 純

る思想が現代に於ても教育界と云はず家庭の内部と云はず、特に宗教界に於ては甚だしく、凡そ社會の表面を一般に支配して

ゐると云ふ事實は今日と雖も未だ動かす事が出来ない。

そうして傳承の戒律を失つて來た方面に於いて、新たにその勢を振はむとするものは輿論の戒律である、戒律の内容は時勢につれて幾度か轉變しても、戒律主義は依然として其の勢力を保持してゐる、然るに吾人が思想に矛盾するものは單に誤れる戒律の内容のみではなく戒律主義そのものである。

吾々が正邪といふ概念の中に包含させるものは何であつても苟も一向きな正邪の觀念を以て人格價值の内容を測り又吾人を束縛せんとする思想は、其の傾向に於て吾人の思想の敵であると云ふ可きで、従つて吾人は單に傳統の戒律を絶對化する思想のみならず輿論の戒律を絶對化する思想とも亦戦はなければならぬ。戒律主義の生活から脱却することは單純な過去の問題ではなくて又現在と未來との問題である。これを打破するために出来るだけ明瞭な認識の武器を用ひることは今日に於ても決して無用な仕事ではないであらう。故に私はこの信念の上に立つて戒律主義の自滅を論證して見たい。然してこの論證を試みるために戒律主義を眞理であるとの假定より出發する、即ち人間は彼が正しく行爲をするかしないか、正邪の岐路に立つて踏み迷ふか迷はないかの一点に懸つてゐるとすれば、他人に對する態度に於て正しい道を踏み迷はない爲に吾人は自ら如何なる條件を充す事が必要であるか。他人の現在とりつゝある道が正道に叶つてゐるか否かを見る事のみに依つて吾々の彼に對する態度が常に正しく決定されてゐることを得ようか。即ち換言

すれば戒律を萬能と見る者が他人の正邪を見ることは、其者を正しい人にする爲に何時でも充分な條件であると云ふ事が出来るかと云ふ事である。

私は、此の事態を明らかにする爲に卑近な一例を取る事にする。

吾々は自ら正しい人となるために「罪と罰」のソニヤと、夫に對して眞實の愛なくして而も夫の富貴を誇る貴夫人と——この二者に對して如何なる態度をとるべきであるかを考へて見る必要を感じる。

ソニヤは父と繼母と其子の爲に身を賣つた女である。併し身を賣つたのは彼女ばかりでない。彼の貴夫人も夫に對する愛なくして結婚してゐるとせば、やはり彼女も富貴に代へる爲に身を賣つた女である。

縱令如何に法律上手續きを履んでゐるにせよ。又如何に婢僕の追従を受けてゐるにせよ——悉く身を賣つた者である。

此の兩者は身を賣るといふ不義に陥つてゐる点に於て等しく戒律に背き、而も等しく同一範疇の戒律を犯してゐる。

然らば吾人は此の兩者に對して又同一の態度を取る可きであるか。此の兩者を同様に及拔ふことによつて、吾々は吾々自身正しい人となる事が出来るか。

否吾々はこの兩者の罪に對して同様の態度をとることに依つて甚しく不正な者となるであらう。ソニヤに對して正當なる態度は、彼女に保護を與へ、彼女の傷ける心を劬り哀んでやるこ

とである、そして汚穢の中に於いても猶純眞の心を保つてゐる彼女の美点を尊敬する事である。併し彼の貴夫人に對する時何よりも必要なのは彼女の無反省と高慢さに一撃を加へる必要がある、即ち彼女も亦身を賣る者であること、而も贅澤と虚榮との爲に身を賣るは家族のパンを得るために身を賣るよりも遙かに恥すべきことで、卑しき動機の爲に身を賣る者は愛の爲に身を賣る者を輕蔑する資格なきこと——凡そ此等のことを自覺させることである。此の二つの態度を區別せざるとき吾々は、共に正しからぬ行爲に陥ることを免れないのである。

然らばこの二區別は何處より來るか。即ち兩者共に邪淫なる戒律を犯してゐると云ふ同一の事實より來る事が出來ないのは勿論である。

それは兩者の間に於ける何等かの差別に基いてゐなければならぬ。そしてその差別は純粹と不純の差別、無自覺なる高慢と無邪氣の差別である。自己を犠牲にせむとする心と利己を第一にする心との差別である。

兩者の内心に於けるこの差別は、當然にこれに對する吾々の態度の差別を喚起するのである。

併しこの場合に於ても吾々の態度の正、不正とが單に兩者を邪淫の罪から脱却させる目的のために有効であるかないかのみによつて決定されるならば、吾々の究竟の目的は、矢張り、自らも戒律を守り他人にもこれを守らせることに歸結するであらう。

固よりこの場合に於て此の方面の着眼も亦重要である。即ち如何に純眞なる人と雖もこの生活が永續する時、邪淫が其人を腐蝕せしむるを免れざる恐る可き生活であるから。——

故にこの迷路より脱却させる爲の目的を持つて前者を勉はり後者を痛撃するとせば、吾々が態度の正と不正とは一面に於て確かにこの標準によつて決定されるものとも云ひ得るのであらう併し問題は果してこれが唯一の標準であらうか？

否更に我々の本來根本的な欲求として純眞がそれ自身に於て尊敬を要求し、不純な高慢がそれ自身に於て輕蔑を要求するからである。

即ちソニヤの純眞を敬愛し貴夫人の高慢を憎む吾々の内面的態度は結果の如何に關はずそれに相當する行爲に於てその表出を求める、この場合に於ける吾々の行爲の正邪は純眞と高慢との内面的價值と不價值とを正當に味會してゐるか否かに依つて分れるのである。茲に於て外面的なる戒律主義は自滅に歸せざるを得ない。他人に對して正當な態度をとれと云ふのは、吾々の行爲に對する規則である。それ自身に於いては外面的戒律主義の意味に於ける一つの戒律である。

然るに吾々は、この戒律を徹底的に實行せむが爲には、少くとも他人に對するとき彼が戒律を守るか守らぬかを見るのみでは不備なる事を發見したのである。即ち吾々が他人に對して正しく行爲するためには彼の行爲のみでなくて、其の動機や心情の全体を洞察する必要がある。而も斯の如き洞察を要するのは

彼の行爲を戒律に従はしめるための方便としてのみでなくて、動機や心情そのものに獨立の價值があるからである。故に此等のものを其の獨立の價值に従つて取扱ふことを怠るとき、吾々は價值あるものを其の價值相當に取扱はぬと云ふ點に於て既に不正行爲に陥るからである。

過誤なきを期するは戒律の理想である。然るに他人に對する行爲に於て自ら過誤なきを得んがためには他人の生活に於ける過誤の有無以上更に深刻に他人の内生を見なければならぬ。戒律の完成は戒律以上の活眼を開ける者に取つてのみ可能であると云ふ可きである。そして他人の生活に戒律以上の價值の獨立を承認せる以上自己に對しても其のものを承認す可き事は當然の歸結である。

戒律に叶ふか否かの一點にのみ着眼して自己の生活を規定するとき、吾々は他人に對すると同様に自己に對して不正を行ふものである。戒律は人格向上のためにあるもので、人格全体が戒律のためにあるのではないとの結論を得るのである。

此の平凡にして自明な結論を正當に尊重することを忘れたため、社會にどれほど不正行爲が行はれてゐることであらう。

道德や正義や輿論や良風は、それが一向きな戒律の意味に於て主張されるとき、悉く不正行爲を誘發する原因となる。それは他人に對しては彼の自由な心を萎縮せしめ、彼の改惡遷善の實行を困難ならしむる不正行爲である。

それは自己に對しては、自己の人格を全局に亘つて開發せん

戒律への抗議

とする努力に濁つた重苦しい制限を置かうとする不正行爲である。

斯如き社會に於て人格の自由な快活な發展を期す事は困難である。吾々の社會を惡くしてゐるものは戒律に背く者の不正であるか戒律の名に於て他人を審かむとする者の不正であるか疑ざるを得ない。

詐欺や收賄や邪淫や現在猶も存する闇取引の如く戒律に背く不正が吾々社會の禍となつてゐることは云ふ迄もないが戒律の意識を反省することなく主張するため頑迷な壓迫と憎惡とを敢てする者、動機と心情に對する洞察なしに外形のみに依つて他を審かむとする者、過誤の中にある純眞を愛することを忘れたる者、自ら省みて他を寛恕する心を失へる者——此等戒律尊重者の社會を混濁せることは前者より返つて甚しいものがある。中に甚しきは自己の利益を最後の目的として正義を主張し自己の利慾を遂げるに必要な點に於て嚴しく他人に戒律の實行を責むる者である。

私は此の意味に於て現在世界を擧げて戰亂の坩堝と化し其中に有つて東亞の盟主として力強く大地を踏みしめて再出發をなす日本の中に有つて猶も如斯輩の存するを悲み敢て愚文を馳せて覺醒を促す次第である。

